「教育臨床総合研究８　2009研究」

基礎体験領域における４年間の学生の学びの変容について

A Longitudinal Analysis of Self-evaluated Experiential Learning Outcomes in the Basic Experience Area

長澤郁夫*　青山巧*
Ikuo NAGASAWA　Takumi AOYAMA
池山圭吾*　福間敏之*
Keigo IKEYAMA　Toshiyuki HUKUMA
高須佳奈*　小川巌**
Kana TAKASU　Iwao OGAWA

要　旨

島根大学教育学部での新しい教員養成カリキュラムである「1000時間体験学修」の３つの体験領域（「基礎」「学校教育」「臨床・カウンセリング」）が平成16年度から始まり、平成20年３月に、初めての卒業生を送り出した。本研究では、その間の「1000時間体験学修」における基礎体験領域で学生にどのような力がついたのか、２～４学年にかけての自己評価を基に分析した。その結果、「子ども理解」「人間関係力」「学校理解」などの自己評価値や体験有意義感において顕著な増加傾向が認められた。

［キーワード］　1000時間体験学修、基礎体験、自己評価、学修成果

Ⅰ　はじめに

平成16年度からスタートした島根大学教育学部における新しい教員養成カリキュラムである「1000時間体験学修」の３つの体験領域（「基礎」「学校教育」「臨床・カウンセリング」）を実施して４年が過ぎ、平成20年３月に初めて、1000時間体験学修を修了した卒業生を送り出した。その体験時間数の平均活動時間は1172時間（最大：2875時間　最低：1001時間、平成20年２月時）であった。本研究では、その間の基礎体験領域での活動に対する学生の意識とその変容について、学生の自己評価のアンケートを基に報告する。

「1000時間体験学修」とは、全国初の試みとして1000時間に及ぶ体験学修を卒業要件として必修化した本学部での教育課程である。この体験学修は、地域の学校等に学生が出向き活動する「基礎体験」、附属学園における「学校教育体験」、学部での講義・実習を中心とする「臨床・カウンセリング体験」、これら３つの体験領域から構成されている。

*島根大学教育学部附属教育支援センター専任基礎体験領域担当
**島根大学教育学部附属教育支援センター長（心理・発達臨床講座）

特に「基礎体験」は、地域の学校・社会福祉施設・NPO等の団体（事業主）からの、学習支援・放課後学童クラブ・授業補助・各種行事活動補助等の活動申し込みを教育支援センターが受け、これらの情報を学生に提供し、学生が自己選択した活動にセンター専任教官が事前指導を行って送り出している。課外活動、ボランティア活動、社会経験の単なる集積ではなく、あくまでも学校教員を養成するためのプログラムである。このプログラムは、教員としての学部教育における学生の資質・能力の向上をめざし、地域の学校や社会教育施設との連携と協力により、学生により豊かな社会性や人間関係力を身につけさせ、教育的実践力を培うことをめざして実施しているものである。

また、「基礎体験」を通してねらう力として、具体的には６つの力（子ども理解、人間関係力、社会の一員としての自覚、企画力、指導力、学校理解）を設定し、評価の具体的観点として、各活動ごとの事後指導の際や、各学年ごとの振り返りのセミナーの際に自己評価をさせている。

Ⅱ　アンケートの調査方法と調査結果

基礎体験活動が初めてスタートした、平成16年度入学生（2004年生）に対して、資料１（P17）で示す基礎体験に関するアンケート（自己評価）を２年生時、３年生時、４年生時の３回にわたって行った。

アンケート実施時期
　１回目　平成18年２月（２年生時の「１・２年生交流会」で実施）
　２回目　平成18年12月（３年生時の「応用期セミナー」で実施）
　３回目　平成19年12月（４年生時の「発展期セミナー」で実施）　有効回答数１５５名

４年間にわたる基礎体験でどのような力が育ったのかを、学生の自己評価からまとめた。調査内容は、アンケートの自己評価の項目として基礎体験でねらう６つの力（子ども理解、人間関係力、社会の一員としての自覚、企画力、指導力、学校理解）と有意義感の項目である。それぞれの項目に対し質問を設け、５段階評価（５が最も高い評価）で行った（資料１参照）。

実施したアンケート項目の、回答欄の５段階の回答を、４・５（以後４・５評価）と、１・２（以後１・２評価）の２つに分けて分析を行った。なお、今回は学生の顕著な変容を明確にするために、回答欄の３「どちらともいえない」（以後３評価）については分析に加えていない。

そのアンケート結果の自己評価の年度推移について、具体的な数値と年度間の差の数値をまとめたものを表１に示す。

表１　基礎体験学修の自己評価の変化

		４・５評価（%）						１・２評価（%）					
		① 2006.2月	② 2006.12月	③ 2007.12月	①-②の差	②-③の差	①-③の差	① 2006.2月	② 2006.12月	③ 2007.12月	①-②の差	②-③の差	①-③の差
	Ⅱ有意義感	58.3	79.0	81.3	20.7	2.3	23.0	16.5	2.8	3.9	-13.7	1.1	-12.6
1	子ども理解①	59.3	66.1	75.5	6.8	9.4	16.2	11.9	8.1	7.1	-3.8	-1	-4.8
2	子ども理解②	48.9	64.5	69.7	15.6	5.2	20.8	19.2	8.3	6.5	-10.9	-1.8	-12.7
3	子ども理解③	51.1	57.3	74.2	6.2	16.9	23.1	12.5	11.1	5.8	-1.4	-5.3	-6.7
4	人間関係力①	38.4	48.3	64.5	9.9	16.2	26.1	33.5	19.5	12.9	-14	-6.6	-20.6
5	人間関係力②	38.8	50.6	61.3	11.8	10.7	22.5	30.7	12.3	13.5	-18.4	1.2	-17.2
6	人間関係力③	57.7	58.9	72.3	1.2	13.4	14.6	7.1	7.2	3.2	0.1	-4.0	-3.91
7	社会の一員としての自覚①	84.6	86.1	91.0	1.5	4.9	6.4	1.6	1.7	2.6	0.1	0.9	1.0
8	社会の一員としての自覚②	69.7	65.6	85.8	-4.1	20.2	16.1	7.1	10.6	3.2	3.5	-7.4	-3.9
9	企画力①	38.4	40.0	40.0	1.6	0	1.6	34.1	30.6	27.1	-3.5	-3.5	-7.0
10	企画力②	35.7	44.5	49.0	8.8	4.5	13.3	27.4	23.9	18.1	-3.5	-5.8	-9.3
11	指導力①	47.8	59.5	55.5	11.7	-4.0	7.7	14.8	7.3	12.9	-7.5	5.6	-1.9
12	指導力②	34.6	43.8	45.8	9.2	2.0	11.2	31.9	25.6	19.4	-6.3	-6.2	-12.5
13	学校理解①	27.5	60.6	67.1	33.1	6.5	39.6	25.8	15.1	9.7	-10.7	-5.4	-16.1
14	学校理解②	46.7	65	72.3	18.3	7.3	25.6	12.1	14.4	11.6	2.3	-2.8	-0.5

表１の、１「子ども理解①」から14「学校理解②」の具体的な項目内容は次のとおりである。

1　子ども一人ひとりに目配りができ、積極的にかかわること。
2　子どもの発達段階の違いに応じてかかわること。
3　子どものしぐさや表情、言葉などから気持ちや感情を理解し行動すること。
4　地域の人たちと積極的にかかわりを持とうとすること。
5　地域の人たちと協力して活動すること。
6　自分の考えを伝えたり、相手の立場に立って聞こうとしたりすること。
7　場に応じた挨拶や言葉遣い、服装をすること。
8　社会人としての自覚や責任を持って行動すること。
9　人や環境、時間などの条件を考慮しながら、自分の考えやアイデアを積極的に出し企画すること。
10　状況に応じて活動内容を修正しながら運営すること。
11　個人や集団に対して、活動のねらいに応じた指示や助言をすること。
12　状況に応じて意見をまとめたり、リーダーシップを発揮したりすること。
13　学校の特色などを理解すること。
14　教師の仕事などを理解すること。

Ⅲ　平成16年度入学生の学びの変容（自己評価の推移から）

１．４・５評価の全体推移からわかること

平成16年度入学生の学びの変容について、４・５評価の全体推移からわかったことをまとめてみる。そのために、表１の基礎体験に対する４・５評価の各年のデータの推移を、図１に折れ線グラフとして示した。

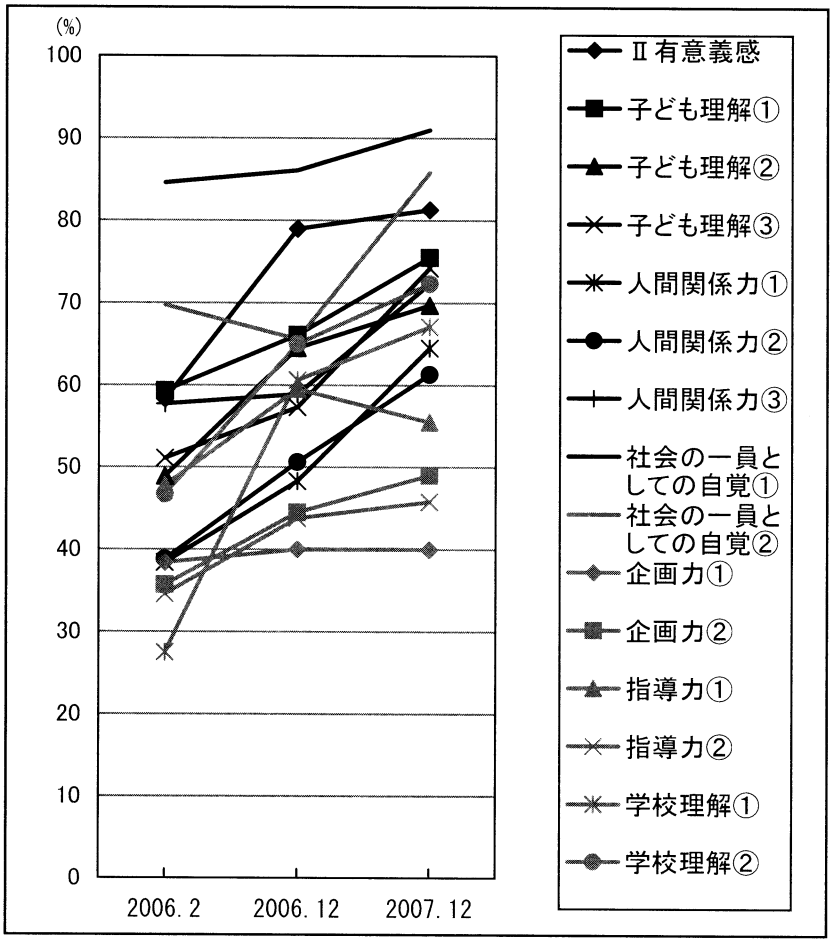


図１　基礎体験に対する４・５評価の割合の推移

図１のグラフの横軸は２年時（2006.2）、３年時（2006.12）、４年時（2007.12）を示し、縦軸は全部で15項目の質問に対する５段階評価の４と５の人数割合を％で示したものである。

全体的な傾向から言えることは、ほとんどの項目が学年を経るにつれて上昇する傾向であり、４・５評価の割合が高くなっている。学生の自己評価から、基礎体験学修でねらう６つの力がそれぞれに育ちつつあることがわかる。

有意義感の変化についても、４・５評価の割合が２年時が58.3％、３年時が79.0％、４年時は81.3％と年々増加している。特に、３年時の実習セメスターでの学外教育体験活動をしたあとの増加が際だっており、20％あまり上昇していた。アンケートの記述から、３年時後期の実習セメスターでの学外教育体験活動や、これまでの基礎体験の経験が、学校教育実習Ⅳにおい

て相互に役立ったことがその理由として考えられる。

また、４年時（2007.12）の段階で、８割以上の高い水準にあったものが、社会の一員としての自覚①②、そして有意義感である。逆に、５割以下の比較的低い水準にとどまったのが、企画力①、企画力②、指導力②であった。

６つの力のうち、特に顕著な伸びを示しているのが、子ども理解①～③と、人間関係力①～③、学校理解①②である。具体的に見ると、子ども理解では、50％台が70％台まで上昇しており、人間関係力でも、40％台が60％台まで上昇している。また、３年後期の実習セメスター後の学校理解の伸びも著しい。特に学校の特色の理解は30％弱から、２倍の60％台まで急上昇していることが分かる。

逆に、横ばいなのは企画力①で、その要因として企画まで任されて活動できる体験がそう多くはないことが考えられる。さらに、指導力①が４年時に下がっているのは、「子どもにあった指示や助言をするタイミングが難しい。」「指示しすぎてしまう、その境界を見極めるのが難しい。」とアンケートのコメント欄で学生が答えているように、実習セメスターや４年時でのさらなる体験を通して指導力の捉え方が深まり、自己の指導力がまだ十分には育っていない点を実感したことにも一因があると考えられる。

以上のように、子ども達や地域のいろいろな方々とふれあう体験を通して学んできた基礎体験活動の４年間の学びの成果が、学生の自己評価アンケートの結果からわかった。

２．１・２評価の割合の推移

一方の１・２評価の割合の推移を示したものが図２である。

１・２評価の割合は、４・５評価の割合と概ね逆の推移を示している。その中で、１・２評価の割合が2006.12の３年生時から、2007.12の４年生時に向けて増加（悪化）しているものが、指導力①（個人や集団に対して、活動のねらいに応じた指示や助言をすること）である。またやや増加（悪化）しているものが、人間関係力②（地域の人たちと協力して活動すること）と有意義感であった。これらの背景には、４年時になると基礎体験の体験時間数が、学生が就職活動や採用試験に向かう準備のために少なくなることに、一因があると考えられる。

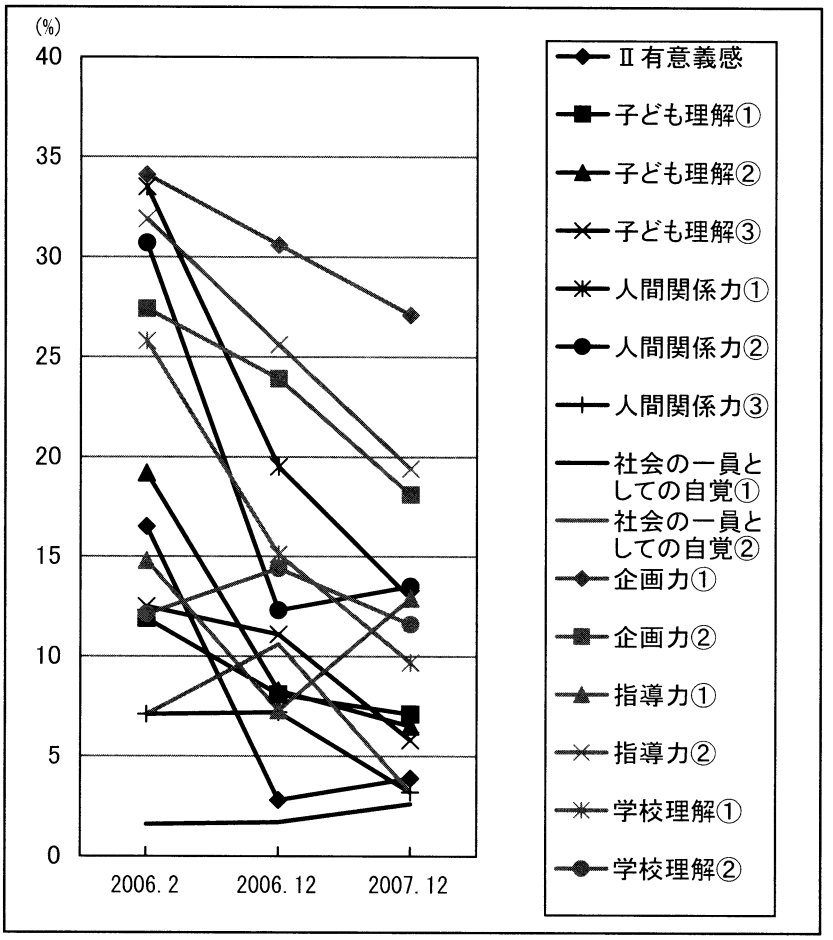


図２　基礎体験に対する１・２評価の割合の推移

Ⅳ　平成16年度入学生の４年時の自己評価結果の分析

次に、平成16年度入学生の４年時（2007. 12）の基礎体験学修に対する自己評価のアンケートデータをもとに、各項目ごとの具体的な状況について、記述回答も参照しながら詳細に見てみる。

基礎体験活動に関するアンケート	実施日　2007. 12. 7
アンケート対象者・・平成19年度４年生	有効回答数１５５名

（１）基礎体験活動への有意義感の結果

４年生時の、基礎体験活動への有意義感の、５段階ごとの割合のグラフを図３に示す。

とても有意義だと思うと答えた学生が全体の34%、有意義だと思うを合わせると81%を占めた。あまり有意義ではない、有意義ではないを合わせても、全体のわずか４%にすぎない。基礎体活動の意義を認めている学生が非常に多いことがよくわかる。

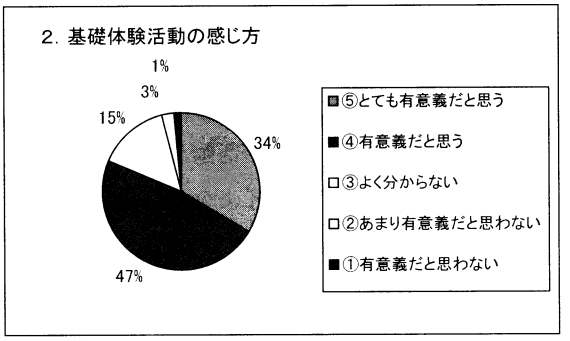


図３　基礎体験活動の感じ方

その理由

⑤「とても有意義だと思う」理由

・いろいろな分野を体験することができて視野が広がるから。
・大学だけでは知り得ない知識や人との関わりによって、大きく自分自身に影響したと思う。
・社会人としてのマナーを身につけることができ、たくさんの人との出会いがあり、自分が大きく成長したと思うから。
・就職してからも役立つような知識・技術を身につけることができたし、進路を決定する時にも役立ったから。
・最初は、1000時間という時間数の多さに抵抗があったが、教育実習などに行くと、体験での経験がとても役だったから。
・最初は否定的であったが、振り返ってみるとやはり実体験の必要性があると感じたから。
・入学した頃は、仕方なくやっていた活動だったが、やってみてその面白さや自分に返ってくるものの大きさを感じ、積極的に参加するようになった。
・直接子どもや学校の先生、施設の方々とふれあい、学べる機会は教育者を目指す者としてとても役立つから。
・他の大学にないプログラムでとても有意義だった。教員採用試験のネタにもなり、心強かった。
・附属小の教育実習ではわからないことを、公立小での基礎体験で知ることができたから。
・友達が増えた、人と話すのが好きになった。

④「有意義だと思う」理由

・もしこれがなければ、大学内だけでの勉強や交流だけだったかもしれないから。
・教育実習だけでは足りないし、継続的に学校で活動を行うことは必要だと思う。
・地域のあり方や、子どもや大人との接し方など、学校の中では学べないものを学べたから。

③「よく分からない」理由

・有意義であると思うが、消化しないといけない時間数が多いため、色々なものの障害になりやすいから。
・体験の中身によると思う。
・いろいろできるのは良いと思うが、他にやりたいことが沢山あると負担になる。
・身についたかどうか分からないため。
・目的を持てない人もいる。いやいややっても意味がない。
・時間数が多すぎるため、単なる時間消費として活動を行う人もいると思うから。

②「あまり有意義だと思わない」理由

・強制しても取り組みに差がある。やらされている感が強いと思う。

①「有意義だと思わない」理由

・ただ時間をこなすための活動なので意味がない。

・基礎体験より、アルバイトをしたり旅行に行ったりする方が自分の身になったと感じるから。

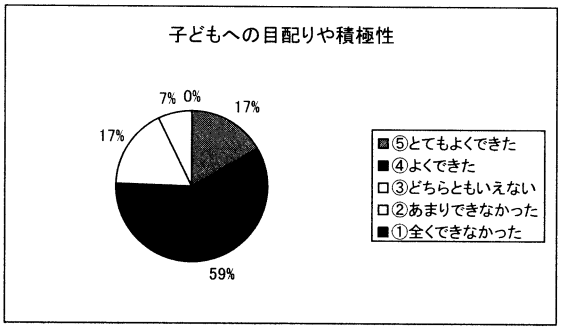
とても有意義だと思う理由については、基礎体験によって視野が広がった、多くの人との出会いがあり自分が大きく成長した、という人間的な成長面からの視点。自分の進路決定にも役だったところ。教育実習場面や、採用試験の面接等でも直接役立つ場面が多かったという視点。社会人としてのマナーの習得の点など、いろいろな視点から有意義感をとらえていた。また、これまでどちらかといえば否定的であった学生も、体験を積むにつれて肯定的な考えに変わり、意欲的に活動に取り組むようになった学生も多いことがわかった。

しかし一方で、全体の４％の６名であったが、有意義だと思わない理由に、自分にやりたいことを持っている場合は、やらされ感を持つ学生もみられた。また、「よく分からない」とした理由に、体験の中身によると思うとの回答があった。今後、基礎体験活動の質の向上を図るためにも、受け入れ先の事業所や学校等との連携により、より質的に高い体験活動となるような工夫も必要となってくる。

（2）「６つの力」の項目別の結果

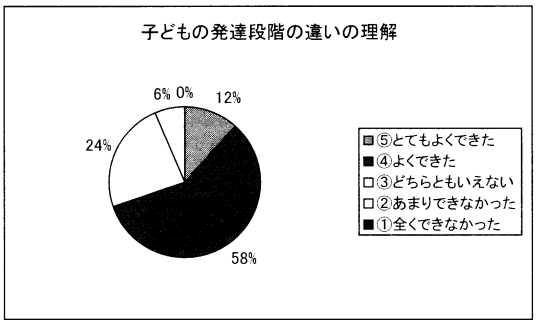
❶子ども理解について

設　　問	とてもよくできた	よくできた	どちらともいえない	あまりできなかった	全くできなかった
①子ども一人ひとりに目配りができ、積極的にかかわること	5	4	3	2	1
②子どもの発達段階の違いに応じてかかわること	5	4	3	2	1
③子どものしぐさや表情、言葉などから気持ちや感情を理解し行動すること	5	4	3	2	1



①子どもへの目配りや積極的について

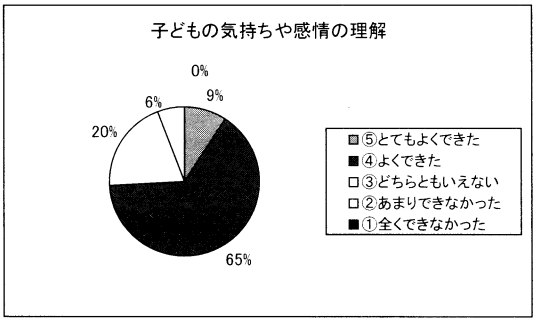
子ども理解についての質問項目は、３項目あるが、その中でも、①の子ども一人ひとりへの目配りや、積極的なかかわりについて、とてもよくできたが17%、よくできたを合わせると76%と割合がかなり多い。



②子どもの発達段階の違いの理解

子どもの発達段階の違いに応じてかかわることについては、とてもよくできた、よくできたを合わせると70％で、おおむね良好である。

基礎体験をとおして、様々な年齢の子ども達とふれあう中で、理解がより一層深まったと考えられる。

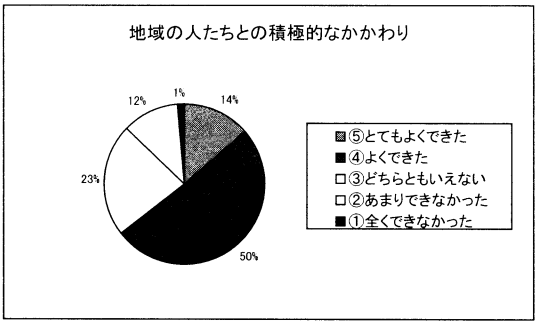


③子どもの気持ちや感情の理解

子どものしぐさや表情、言葉などから気持ちや感情を理解し行動することについては、①の質問結果とほぼ同じ結果であった。子どもの気持ちや感情を理解し行動するに対して、全体の74％がとてもよくできた、よくできたと答えたことは、基礎体験がもたらした大きな成果ではないかと考える。

❷人間関係力について

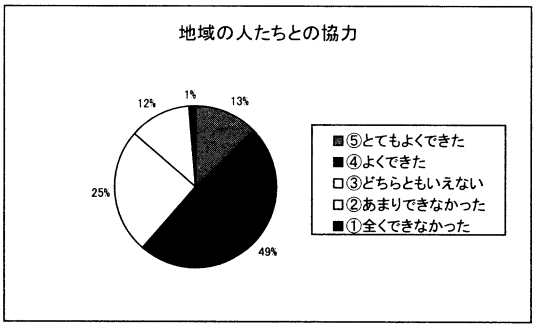
④地域の人たちと積極的にかかわりを持とうとすること	5	4	3	2	1
⑤地域の人たちと協力して活動すること	5	4	3	2	1
⑥自分の考えを伝えたり、相手の立場に立って聞こうとしたりすること	5	4	3	2	1



④地域の人たちとの積極的なかかわり

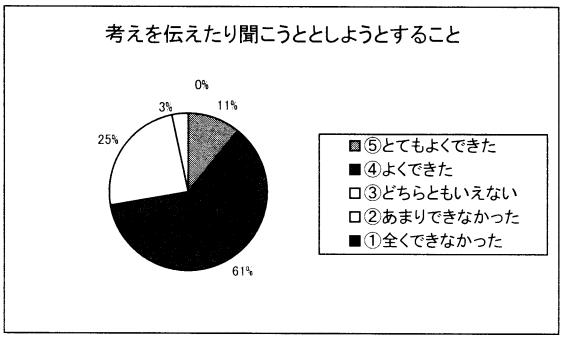
地域の人たちと積極的にかかわりを持とうとすることに対しては、64％がとてもよくできた、よくできたと回答した。

地域に開かれた基礎体験で、積極的なかかわりを持とうとする学生の意識が高いことがわかる。



⑤地域の人たちと協力

地域の人たちと協力して活動することについても、④のかかわりへの意欲とほぼ同じ結果が得られた。



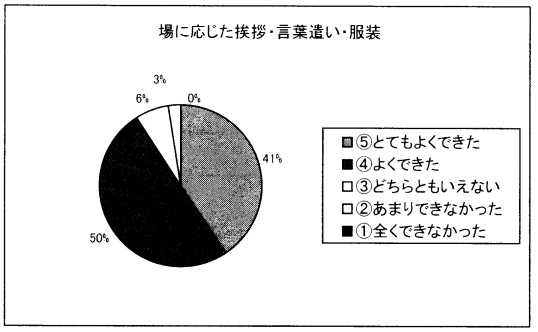
⑥考えを伝えたり聞こうとしようとすること

自分の考えを伝えたり、相手の立場に立って聞こうとしたりすることの項目は、人間関係力についての項目の中でも、とてもよくできた、よくできたと回答した割合が72％と、他の２つよりも高くなっている。

基礎体験の中では、実際のコミュニケーションをうまく取っていかないと先に進まない場面がほとんどなので、人間関係力育成に体験学修が大いに役立っていることが、この結果から理解できる。

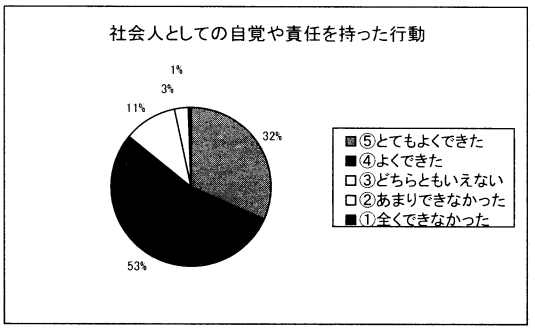
❸社会の一員としての自覚について

⑦場に応じた挨拶や言葉遣い、服装をすること	5	4	3	2	1
⑧社会人としての自覚や責任を持って行動すること	5	4	3	2	1



⑦場に応じた挨拶・言葉遣い・服装

場に応じた挨拶や言葉遣い、服装をすることに対しては、91％の学生がとてもよくできた、よくできたと回答している。地域や社会の一員として、場をわきまえた振る舞いについても学ぶことができた成果がよくでていると考えられる。

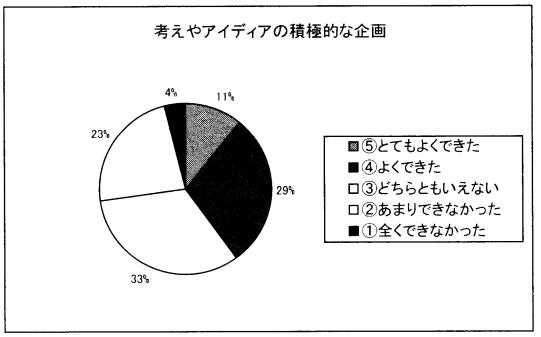


⑧社会人としての自覚や責任を持った行動

社会人としての自覚や責任を持って行動することについては、⑦と比べるとやや達成率は下がるが、それでも85％がとてもよくできた、よくできたと回答している。基礎体験をとおして時間を守ったり、責任を果たす等の自覚が、より高まった結果と考えられる。

❹企画力について

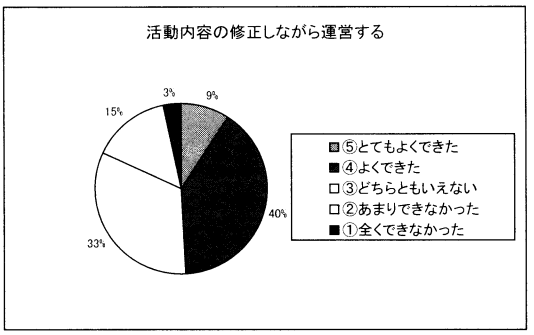
⑨人や環境、時間などの条件を考慮しながら、自分の考えやアイデアを積極的に出し企画すること	5	4	3	2	1
⑩状況に応じて活動内容を修正しながら運営すること	5	4	3	2	1



⑨考えやアイデアの積極的な企画

企画力については、⑨の自分の考えやアイデアを積極的に出し企画することに対し、とてもよくできた、よくできたが40％であった。逆にあまりできなかった、できなかったは27％であった。

これは学生が選択した基礎体験のプログラムによる影響も強い。今後自らの企画力を高めるためには、学生がどのような基礎体験を積めばよいのかという選択の視点も必要であり、その情報提供も大切なことであると考える。

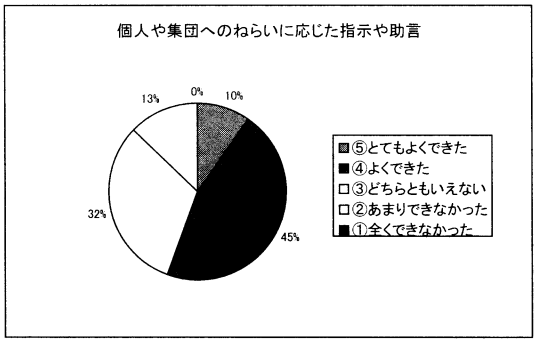


⑩活動内容を修正しながら運営する

状況に応じて活動内容を修正しながら運営することについては、先の⑨よりも逆によい結果が得られている。与えられた体験プログラムを受け身でやり過ごすのではなく、自分なりの修正を加えて運営していこうとする力がついているのが読み取れる。

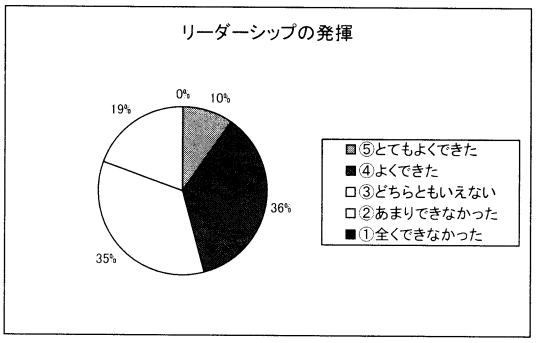
❺指導力について

⑪個人や集団に対して、活動のねらいに応じた指示や助言をすること	5	4	3	2	1
⑫状況に応じて意見をまとめたり、リーダーシップを発揮したりすること	5	4	3	2	1



⑪個人や集団へのねらいに応じた指示や助言

指導力の⑪は、個人や集団に対しての指示や助言に関してであるが、とてもよくできた、よくできたが55％であった。この項目だけは、３年時の数値（59％）から唯一４％ほど下がっている。子どもへの指示や助言をしたりする活動自体が、４年時はやや少なかったことにも原因があると考えられる。

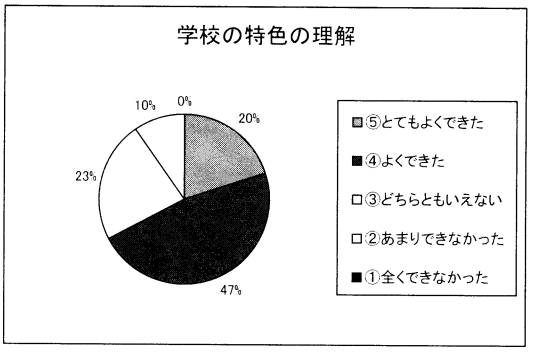


⑫リーダーシップの発揮

リーダーシップの発揮という点から見ると、⑪とくらべ若干低い傾向にあり、どちらともいえないと答えた割合が35%と多い。リーダーシップを発揮する場面の有無は、体験学修のプログラムや、企画内容にも影響されることが多いので、リーダーシップ育成に力を入れた体験活動の開発も必要とされる。

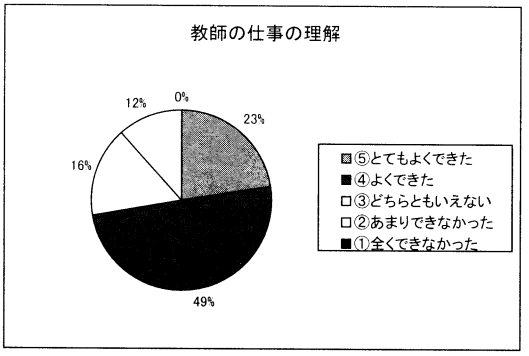
❻学校理解について

⑬学校の特色などを理解すること	5	4	3	2	1
⑭教師の仕事などを理解すること	5	4	3	2	1



⑬学校の特色の理解

学校理解については、とてもよくできた、よくできたが67%と、かなり高い結果であった。学生は教育実習で経験済みであるが、学校の特色や教師の仕事などをより理解するためには、学校現場での少数での体験学修が有効であると考えられる。またこの背景には、３年の後期の実習セメスターでの学外教育体験活動も功を奏しているものと考えられる。



⑭教師の仕事の理解

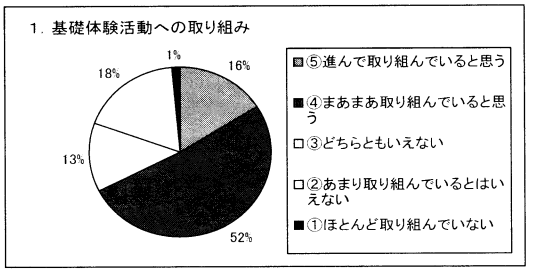
教師の仕事などを理解することについても、全体の72%がよく理解できたと回答している。

教育実習は授業実践が主であるので、教師の仕事の全体把握までは難しいが、先の実習セメスターでの学外教育体験活動も含めた学校現場での体験学修が、学校理解に一層役立っていると考えられる。

（３）基礎体験活動への取り組み状況の結果

質問内容：みなさんの基礎体験活動への取り組み状況について、当てはまる内容を１つ選び、番号に○をしてください。

⑤　進んで取り組んでいると思う　16%
④　まあまあ取り組んでいると思う　52%
③　どちらともいえない　13%
②　あまり取り組んでいるとはいえない　18%
①　ほとんど取り組んでいない　１%



その理由

⑤「進んで取り組んでいると思う」の理由
・規定の時間が終わった今も続けて行っているから。
・地域、子ども、学校ともバランスよく取り組めた。特に小学校教員を目指していたので、学校領域はよく取り組んだ。

④「まあまあ取り組んでいると思う」の理由
・初めは仕方なしだったけれど、意外と奥が深く面白いと感じることができたから。
・専攻分野に関わる体験活動もあったので「勉強になる」という意識で取り組むことができた。
・定期的に参加している活動はあるが、活動の幅はあまり広くないから。

③「どちらともいえない」の理由
・活動数は多くないが、一つのことを定期的に続けたから。
・人と関わるのが苦手だから。
・1000時間やらなければいけなかった部分が大きく、進んでやっている感じはしなかったから。

②「あまり取り組んでいるとはいえない」の理由
・部活動と重なり、やりたい活動がとりづらい。
・バイトなどであまり時間が取れなかった。
・1000時間を大幅に超えてまで行こうとは思わなかったから。
・教員にならないので、他のやりたいことに時間を使った。
・興味の湧く体験が少ないから。

①「ほとんど取り組んでいない」の理由
・何かと避けてきてしまったから。

進んで取り組んでいると思う学生が全体の16%、まあまあ取り組んでいるものを合わせると68%となり、全体の７割弱を占めている。逆に、あまり取り組んでいるとはいえない、ほとんど取り組んでいないを合わせると全体の２割弱ある。全体としての取り組みは概ね良好といえる。

基礎体験活動をどう捉えるか、その理由の記述から見えてきたことをまとめると次のようなことがいえる。

○継続している体験活動から、活動自体の良さや意義を見出してきている。
○自分の専門性を活かせる体験活動に関わっていくことで、専攻で学んでいることを活かせたり、改めて専攻の面白さを再認識したり理解が深まったりして、体験の良さを感じている。

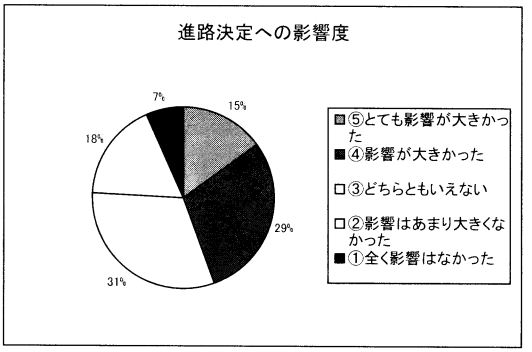
○実習セメスター等の公立学校における体験活動を通して、教育実習とは違う新たな学校理解をすることが、体験学修の良さにつながっている。

△部活動と重なる学生は、時間的に基礎体験への取り組みが負担になっている学生もある。また、少数だが、基礎体験そのものに「やらされ感」からか、価値を見いだせずにいる学生もいる。

（4）基礎体験活動の進路決定や考え方や生き方への影響度の結果

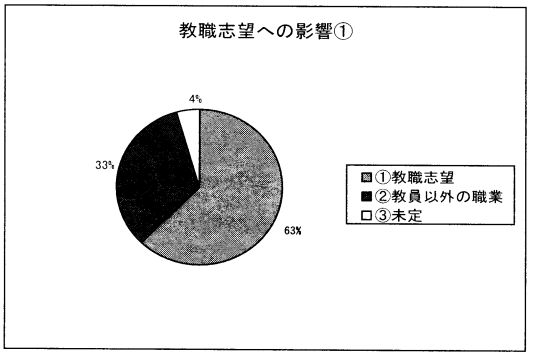
質問内容１：これまでに行った基礎体験活動は、自分の進路決定に際して、どの程度影響を与えましたか。

⑤とても影響が大きかった
④影響が大きかった
③どちらともいえない
②影響はあまり大きくなかった
①全く影響はなかった



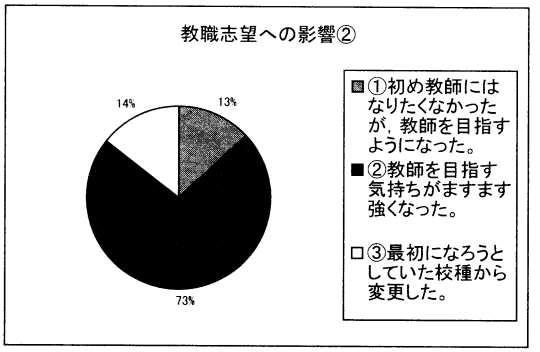
質問内容２：その結果、自分の進路はどういう決定をしましたか。○を付けてください。

①教職志望
②教員以外の職業
③未定



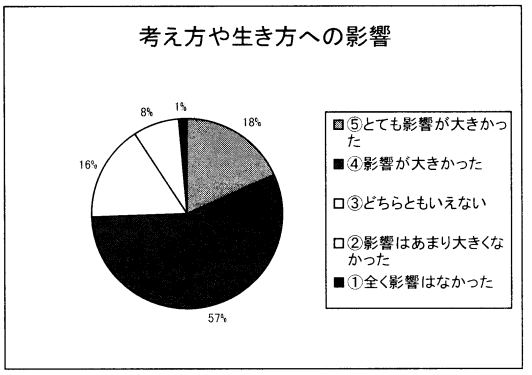
質問内容３：「①教員を志望する」に○をつけたみなさんにお聞きします。
自分は①～③のどの場合に当てはまりますか。教えてください。

①初め教師にはなりたくなかったが、教師を目指すようになった。
②教師を目指す気持ちがますます強くなった。
③最初になろうとしていた校種から変更した。



質問内容４：これまでに行った基礎体験活動は、自身の考え方や生き方に、どのように影響を与えましたか。

⑤とても影響が大きかった
④影響が大きかった
③どちらともいえない
②影響はあまり大きくなかった
①全く影響はなかった



４年時での基礎体験活動のアンケートでは、さらに、基礎体験の進路決定や考え方や生き方への影響度について、上記の４項目の質問を行った。

質問内容１の基礎体験活動は、自分の進路決定に際して影響を与えたとするものが、とても影響が大きかった、影響が大きかったを合わせると44％と、過半数までは至っていない。しかし、教員を志望すると答えた学生の、73％が「教師を目指す気持ちがますます強くなった」と回答しており、教職志向の意識向上に、基礎体験が大きな影響を与えたと考えられる。

また、質問４の基礎体験活動の自身の考え方や生き方への影響に関する質問では、とても影響が大きかった、影響が大きかったを合わせると、75％であった。学校や地域での様々な子ども達や人との関わりのある体験活動を通すことで、基礎体験は学生自身の生き方や考え方に多くの影響を与え、大きな学びの場であったといえる。

Ｖ　成果と今後の課題

今回は、学生の年度ごとの基礎体験活動のふりかえりアンケートに基づいて、1000時間体験学修の基礎体験領域で学生にどのような力がついたのか、学生の自己評価を基に調査し、分析を行った。基礎体験活動の成果として、受け入れ先との連携が進み、受け入れ体制が整ったこともあり、1000時間体験学修の卒業要件をすべての学生が達成することができ、学年が進むにつれて基礎体験でねらう６つの力が育ちつつあることがわかった。

基礎体験における今後の課題としては次の３つがあげられる。

１．基礎体験活動のアンケート調査結果を今後の指導に生かすこと

今回の年度ごとの基礎体験の学生アンケートより、６つの力に対して、自己評価がどの程度の段階で推移していたかがわかった。高い水準にあったのが「社会の一員としての自覚」や「有意義感」である。逆に、５割以下の低い水準にとどまったのが「企画力①」、「企画力②」、「指導力②」であった。

企画力が低いのは、基礎体験のなかで、受け入れ先の事業所から企画まで任される体験活動がそう多くない事にも原因がある。しかし、受け入れ先の一つである、社会教育施設の「島根県青少年の家（サン・レイク）」では、一昨年前から、学生達に企画立案から任せてもらえる「はじめの一歩」の体験活動なども、組み込んでいただいている事例もある。指導者養成講座なども含め、企画力や指導力を育成していく内容も豊富に含んだ基礎体験のメニュー拡大につ

いても、事業所との連携の下ですすめていくなどして改善を図りたい。

また、基礎体験に対してあまり積極的でない学生への指導も、１年時から継続的に行っていく必要もある。単に基礎体験の時間数取得だけの目標だけではなく、学生自身が身につけたい能力に沿ったアドバイスや指導の工夫も図っていきたい。

２．基礎体験活動における３つの体験活動ごとの学びの成果を分析していく

「1000時間体験学修」における基礎体験領域は、現在、①一般的な基礎体験（「子ども」「地域」「学校」の３つを活動フィールドとした基礎体験活動）、②平成18年度から始まった実習セメスター体験（実習セメスターにおける学外教育体験活動）、③専攻別体験（各専攻の専門性を活かした専攻ごとの体験活動）の３つの柱ができている。

今後は、全般的な基礎体験活動への振り返りとともに、②の実習セメスター体験で得た学びの成果、③の専攻別体験で得た学びの成果など、それぞれの特徴を生かした基礎体験でどのような力が身についたか、個別にアンケート調査等を行っていくことも必要である。

また、教員養成における基礎体験の視点からは、基礎体験と学部の専門教育とのつながりを深めるために、今年度から制度化された「学内資格認定」の活用を通して、専攻別体験との連携を一層充実させることなどがあげられる。

３．基礎体験活動の学びの成果調査の実施

基礎体験活動での学びの成果の検証方法として、学生の出口調査等を進めていくこともあげられる。例えば就職状況との体験時間や内容との関係や、教員として採用後の基礎体験の有用性等の聞き取り調査などである。今年度末には、実際に新規採用後の卒業生本人や、職場の管理職への聞き取り調査も行っている。

今後も学生の学びの姿を、アンケートによる自己評価や聞き取り調査などを通じて、継続的に把握していくことが、基礎体験学修の学びの成果や在り方などを考えていくためには肝要であると思われる。

以上の３つの今後の課題と共に、これまでの４年間の実績をふまえながら、学部教育における基礎体験領域において、地域の学校や施設との連携・協力によって、学生により豊かな社会性や人間関係力、教育的実践力を培うことを今後もめざしていきたい。

参考文献

○嘉賀收司・齋藤英明・山中慎嗣・秦　光司・小川　巌「基礎体験活動における学生の学びの変容について」『島根大学教育臨床総合研究Vol.06』島根大学教育学部附属教育支援センター 2007.

資料１

基礎体験活動に関するアンケート　（200○年○月○日△△セミナー）

学生番号　男・女　名前

主専攻（　　）　副専攻（　　）

＊これまでの活動を振り返って、このアンケートに答えて下さい。

Ⅰ　みなさんの基礎体験活動への取り組み状況について、当てはまる内容を１つ選び、番号に○をしましょう。

5　進んで取り組んでいると思う
4　まあまあ取り組んでいると思う
3　どちらともいえない
2　あまり取り組んでいるとはいえない
1　ほとんど取り組んでいない

●その理由

Ⅱ　あなたは基礎体験活動をどのように感じていますか。当てはまる内容を１つ選び、番号に○をつけましょう。

5　とても有意義だと思う
4　有意義だと思う
3　よく分からない
2　あまり有意義だと思わない
1　有意義だと思わない

●その理由

Ⅲ　「基礎体験活動を通して学んだこと」について振り返り、当てはまる番号に○をしましょう。

❶子ども理解について

設　　問	とてもよくできた	よくできた	どちらともいえない	あまりできなかった	全くできなかった
①子ども一人ひとりに目配りができ、積極的にかかわること	5	4	3	2	1
②子どもの発達段階の違いに応じてかかわること	5	4	3	2	1
③子どものしぐさや表情、言葉などから気持ちや感情を理解し行動すること	5	4	3	2	1

★コメント

❷人間関係力について

④地域の人たちと積極的にかかわりを持とうとすること	5	4	3	2	1
⑤地域の人たちと協力して活動すること	5	4	3	2	1
⑥自分の考えを伝えたり、相手の立場に立って聞こうとしたりすること	5	4	3	2	1

長澤　郁夫　　青山　　巧　　池山　圭吾　　福間　敏之　　高須　佳奈　　小川　　巌

★コメント

❸社会の一員としての自覚について

⑦場に応じた挨拶や言葉遣い、服装をすること	5	4	3	2	1
⑧社会人としての自覚や責任を持って行動すること	5	4	3	2	1

★コメント

❹企画力について

⑨人や環境、時間などの条件を考慮しながら、自分の考えやアイデアを積極的に出し企画すること	5	4	3	2	1
⑩状況に応じて活動内容を修正しながら運営すること	5	4	3	2	1

★コメント

❺指導力について

⑪個人や集団に対して、活動のねらいに応じた指示や助言をすること	5	4	3	2	1
⑫状況に応じて意見をまとめたり、リーダーシップを発揮したりすること	5	4	3	2	1

★コメント

❻学校理解について

⑬学校の特色などを理解すること	5	4	3	2	1
⑭教師の仕事などを理解すること	5	4	3	2	1

★コメント

Ⅳ（１）これまでに行った基礎体験活動は、自分の進路決定に際して、どの程度影響を与えましたか。当てはまる番号に○を付けてください。

とても影響が大きかった	影響が大きかった	どちらともいえない	影響はあまり大きくなかった	全く影響はなかった
5	4	3	2	1

（２）（１）の設問で「５または４」と答えたみなさんは、どのような活動が自分の進路決定に影響があったのか教えてください。（複数の場合複数挙げてください）

◎活動名

○その理由

（３）その結果、自分の進路はどういう決定をしましたか。○を付けてください。

（　　）①教職志望

（　　）②教員以外の職業

（　　）③未定

（４）（３）で「①教員を志望する」に○をつけたみなさんにお聞きします。

自分は❶～❸のどの場合に当てはまりますか。教えてください。

（　　）❶初め教師にはなりたくなかったが、教師を目指すようになった。

（　　）❷教師を目指す気持ちがますます強くなった。

（　　）❸最初になろうとしていた校種から変更した。

Ⅴ（１）これまでに行った基礎体験活動は、自身の考え方や生き方に、どのように影響を与えましたか。当てはまる番号に○を付けてください。

とても影響が大きかった	影響が大きかった	どちらともいえない	影響はあまり大きくなかった	全く影響はなかった
5	4	3	2	1